

# この透かし文様は福島正則の軍旗「山道文」か？

伊藤 三平



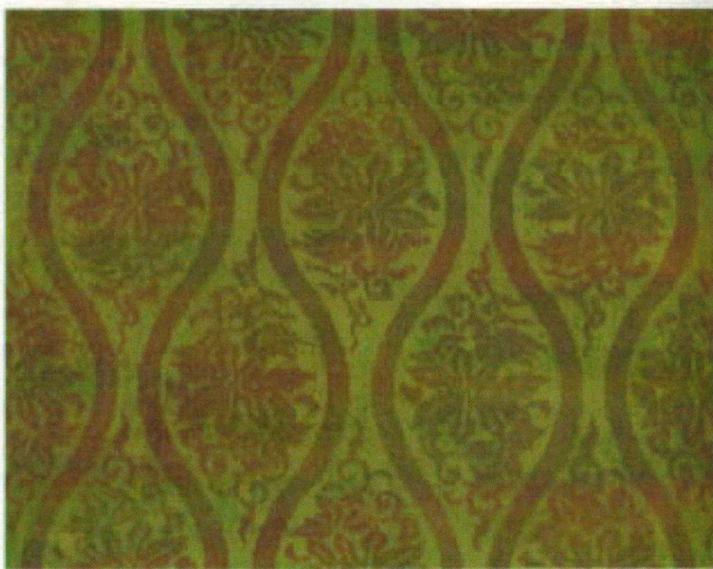
剣美術』463号)では「笈を圖案化したのでは」と一案を提示されている(笈は山伏、僧が行脚する時に、仏具などを入れて背中に負う箱型のもの)。

自分が鐺職人か、鐺を商う商人であれば、鐺のデザインについて説明できないものを造り、販売することはありえないと思う。「これは〇〇を写したもんで、縁起がいいですよ」、「今、都で流行っているんです」などの売り口上を使うし、注文で造る場合は、注文者がデザインに意図を持って指定してくるはずである。

金沢に御縁のある識者は、この図を「湯湧文」と述べられる。この地には湯湧温泉があり、湯が沸くと、蒸気がゆらゆらと立ち上るさまに似ている文様はよく見かけるとのことである。陶器の文様として、「湯湧文」として紹介されているサイトもインターネット上に存在した。(写真は「宙」という陶器販売店で売られていたもので、湯湧文に小梅を描いた「そば猪口」である)

今回、この稿をまとめるに当たり、改めて調査をすると、日本の伝統文様として「立湧文」があることを知る。「有職の文様」(池修著)によると次のような解説がある。ちなみに有職文様とは、平安時代以降に公家階級で装束・調度などに用いられていた伝統的な文様のことを指す。(写真は「麴塵立湧中鉄線文紗」。「有職の文様」より)

麴塵立湧中鉄線文紗



この金山鐺と、同種のもは各書に所載されている。そして図柄については『透し鐺』(小窪健一、益本千一郎、笹野大行、柴田光男著)では「笠透かし」と紹介し、解説に「鉄味は黒く艶があり、耳に鉄骨がはげしく出ている。左右に笠とも海鼠ともみえるものを透している。金山鐺には意味のわからぬものを透したものが多く、昔の人はこれを無意味透しとよんだ」とある。透かし文様については悩まれていることがわかる。

『刀装小道具講座 一 鐺工編』(若山泡沫著)でも図柄は「笠透し」で、解説も同様に「笠とも海鼠とみえるもの」と記されている。

『刀装・刀装具初学教室(14)』(福士繁雄著)『刀



「立湧」は地面から立ち上がる陽気を表す縁起の良い文様とされました。基本的には二本の線で構成されますが、この「立湧」の中に色々な文様を入れました。「立湧」の文様は連続していますので、「続文」として地文に用いられることもあります。」

そしてバリエーションとして立湧の中の模様や、立湧自体の変わり模様として「雲立湧（立湧雲）」、「波立湧」や植物の藤、松、竹、梅、桜、牡丹、丁字、竜胆、撫子、躑躅などを頭に付けた立湧文などが例示されている。中には「定家立湧」（冷泉家と山科家の特定の衣装の文様）と言う特定の公家の文様も存在する。

このように格式が高く、縁起の良い文様であるので、武家の佩用する刀の鐔の図柄でも良いのだが、もう一つの候補を提示したい。

『戦国武器甲冑事典』（中西豪・大山格監修）の「旗」の章を覗いたら、福島正則の軍旗が掲載されており、その山道文が湯湧文と同様のものであることを知る。

同書における説明は次の通りである。

「福島正則の軍旗は、黒地に白で二本の波線が引かれ、旗の上には赤の招きがたなびく「黒地に山道、赤の招き」。文献ではどのような軍旗を用いていたのかの確認はできないが『関ヶ原合戦図屏風』では比較的详细に描かれた軍旗を確認することができた。」（写真は同書より）



（注）現存する関ヶ原合戦屏風は一つではなく、この屏風より新しく描かれた他の屏風には縦棒がクネクネではなく、横にギザギザの山道文の旗が描かれているとの記事もある。なお「招き」は幟の竿の先に付けた細長い小旗である。

鐔は武器である刀に付属するものであり、軍旗にも使われた山道文を透かしたものとすることに不思議でない。

そうすると、この鐔は福島家の注文、あるいは福島家に属する武士が注文したと考えられる。この仮説には、もう一つ根拠がある。

私は鉄鐔が好きで、30枚弱を所有しているが、鉄味が同じと思えるものは無く、奥深く、不思議な世界と思っている。地鉄そのものが違うのか、錆び付けの方法が違うのであろうか（なお鉄鐔には、江戸時代の鐔屋が錆び付け直したものもあると聞いている）。

この中で、この鐔と鉄味が同じと言っていいほど似ているのが、太字銘の信家の鐔である。この銘は後期の銘で、芸州銘に移行する前と考えられる（芸州銘が太字銘信家が移住したとの前提だが）。

安芸国は、福島正則が関ヶ原の合戦後の慶長6（一六〇二）年に尾張から転封された国である。

すなわち、この金山鐔は、太字銘信家が芸州に移住後に、信家に近い作者が、芸州藩の軍旗のデザインで注文を受けたものではなからうかと考えている。

この金山鐔は縦七九・七mm×横七九・五mm×耳厚五・〇mm、切羽台五・〇mm、角耳であり、ちまた巷に見られる金山鐔よりも大ぶりである。こ

ういうことから、この金山鐔の時代が推定されると、他の金山鐔や鉄の透かし鐔の時代判定に役に立つ可能性がある。



銘＝信家（太字銘）

金山鐔と分類されている鐔では、現時点で、そのデザインの意図がわからなくなっているものも多く、『透鐔 武士道の美』（笹野大行著）における金山鐔の特徴紹介の冒頭に「角耳・厚手、意味のわからぬ透しが多く、耳に鉄骨が出て、申し合わせたように小形の鐔である」と評している。

金山鐔に、このように一般的でない図柄が多いのは、広く市場で販売することを考えずに、ある組織内（例えば、この鐔のようにある軍隊の装備や、特定の寺院の僧兵向けとか、柳生鐔のような特定の剣術の流派など）で使用されるのを前提にしていたのではとも考えている。今後も研究していきたい。